

共助が 織りなす

m mobi
Community Mobility

待ち時間で気軽に観光
最大8人まで乗車可能
地元情報も知れる！



■address

香川県三豊市仁尾町仁尾辛35-3

■Website

<https://kurashinokoutsuu.jp/>



暮らしの交通株式会社

代表取締役

田島 颯

持続可能な交通

DISCOVERY

SHIKOKU ZAIMU KYOKU

2025, Feb. @三豊市



地域課題として多く聞かれる交通問題。公共交通空白地域の解消に向けて、全国的に取組が進んでいます。三豊市にある「暮らしの交通株式会社」では、若き移住者である田島さんが、タクシー感覚で利用できる乗合交通サービスを展開しています。教育分野で活躍していた田島さんが交通事業を手掛ける理由や、需要サイドを意識した事業展開について取材しました。

▶ 田島さんってどんな人？



東京都出身の慶應ボーイ。もともと教育活動をされているとのことですが？

高校3年生の時、たまたま教育学を専攻している大学生が授業に来てくれる機会があり、自分もこの人みたいになりたいと強い憧れを抱き、弟子入りしました。毎週のように地方の教育の現場に同行して、高校生にプロジェクトを作ってもらって教育活動をする中で、学校という単位でまだまだ変えられることがたくさんあると考えたことが、今も教育をやっている理由です。



移住することとなったきっかけは？

コロナ禍により大学の授業が全部オンラインになり、東京に居てもしょうがないと思いました。そこで沖縄に住み始め、学習塾の立ち上げなどを行っていたところに、ゼミの先輩の紹介で三豊市教育委員会から**部活動を作るプロジェクトの立ち上げ**を委託されました。東京、沖縄、香川の3拠点で生活する中で、拠点を香川に絞ったという感じです。



自然が豊かで人も良く、コンパクトな地方ならではの行動の速さを感じたことが、香川県への移住の決め手でした。

「みとよ探究部」(2021年9月発足)

市内の中学生・高校生が地域で探究するクラブ活動。

▼マイプロジェクト

自分の興味分野を研究する活動。宇宙のことが好きでダークマターを研究したり、市内にある粟島に若い人を呼び込む方策を考えたりしています。



▼地元を知るためのフィールドワーク

子どもと地域との関係性を蓄積していくために、地元の事業者と部員の相互交流を促す活動を実施。



「瀬戸内暮らしの大学」の立ち上げにも参加されていますね

瀬戸内
暮らしの大学

「瀬戸内暮らしの大学」は、年齢や居住地に関係なくすべての人が一生学び続けることのできる市民大学として、2022年に開講しました。22の地域事業者・個人が集まって設立したもので、私も事務局として立ち上げに参加していました。もともとは「地元の中小企業が社員研修をするのに1社ごとだとコストが悪い」との声から始まったものです。ダンスやアートのクラスから、財務諸表の読み方、事業承継など、多種多様な学びを提供しています。

▶ 教育を受ける機会の格差

「みとよ探究部」の活動をする中で、欠席理由で一番多かったのが「親が送迎できないので今日はいけません」だったんです。共働き世帯の増加により、保護者が送迎に割ける時間が限られてきている。加えて、学校の統廃合により、子どもたちの移動距離自体はどんどん伸びている。もっと言うと、人口減少の中で1校ではチームスポーツの部活動を行えない。そういった状況を鑑みたときに、移動できる・できないによって、学びの機会にアクセスできる・できないが変わってしまう。この、**移動格差から来る学びの格差を是正したい**という気持ちが芽生えました。このような中、地域事業者たちとの議論の中で交通会社を新しく作ろうという動きが起こり、教育の分野でこのような課題感を持っていた僕が代表をやらせていただくことになりました。

出資会社には交通のプロフェッショナルであるタクシー事業者さんが3社入っているため、代表になることの安心感がありました。また、交通の問題は、どこの地方で教育活動を行っていても出てくる問題です。教育の立場から交通を考え直すことができるため、非常に興味を持ちました。

子どもの試合がある日は送迎が大変。
私も送迎問題に悩む一人です！

▶ mobiのサービス内容

貴社が提供している交通サービスとは？

Community Mobility株式会社が提供している
mobi(モビ)というサービスを展開しています。
分かりやすく表現すると、乗り合いが生じるタクシーというイメージです。



アプリで予約
「迎え地点」と
「行き先」を指定



約20分ほどで
お迎え



同時刻に他の
予約があれば
お迎え



**AIが最短の
ルートを計算。**
各行き先へ



乗降ポイント

現在170箇所以上！
乗降ポイントは月2回、
追加可能。
運行エリアは現在仁尾町
と詫間町の2町。



料金

▼定額乗り放題
月6,000円
(学生は月3,000円)
▼ワンタイム利用
1回500円
▼運行時間
7:00~22:00



利用者

月に延べ約4,000人。
内訳は、6割が学生、3割が観光客、
1割が高齢者。

当初は、アプリを使えるユーザー(特に若い人)に絞って訴求していきま
した。市内に香川高等専門学校(詫間
キャンパス)があり、市営の路線バス
が満員で乗れないとの課題があった
ため、学生たちの足というところをま
ず確保しました。

当日予約、それも20分
ほどで来てくれるとは
便利ですね！

▶ 高齢者に寄り添う「まごころ」



当初の戦略とはいえ、高齢者の利用が少ないですね。

僕も最初交通事業をやり始めるときは、当然高齢者を中心とする移動難民が多いんだろうと思っていました。実際、シニアの方に話を聞きながらいろいろリサーチしていった結果、移動手段の問題の前に、**移動の心理的ハードルがとて高い**ことが分かりました。



買い物には行きたいけど、途中で転ぶのが怖い…。



病院の送迎は子どもにお願いできるけど、友達に会いに行くためには頼みにくい…。



対応策は？

移動を阻んでいる部分を解決するためには、暮らしの部分からサポートしていく必要があると考え、新しく2024年6月から**「まごころサポート」**というシニアを対象とする暮らしのコンシェルジュ事業を始めました。20分1,000円から、お出かけの同行やゴミ出しなどといった簡単なサポートを行います。ケアマネージャーや民生委員ができないことを、**コンシェルジュ**がサポートする形です。

この他、シニアの旅行需要に対応する「ジーバートラベル」や、シニアのスキルを活かす(役割を与える)取組として、料理上手なシニアが町の人にご飯を作る「ジーバーFOOD」や「ジーバーワーク」などの事業も計画しています。

現在、15人程登録あり。



主婦層



移住者

地元の人と繋がりたい！
地元のことを知りたい！



▶ 今後の展開



地域の課題を交通を使って解決する、今後の展開について教えてください。

一般に、公共交通は補助金頼りの面が大きく、持続性に課題があるとされています。交通事業を考える際には、車両の数やドライバーの労働問題など“供給サイド”の議論が多くなされています。

しかし、交通を改めて考え直すと、人が移動するのは行きたい場所、会いたい人がいるからで、交通事業者は移動の欲求という“需要サイド”をもう少し可視化しなければならないと考えています。



例えば近くにあるスナックでは、昼の時間帯を使って、シニア向けにカラオケ喫茶の企画をやっています。これは、地域の中からカラオケ屋さんがなくなり、シニア世代が行ける場所がなくなってしまったという声を聞いてやり始めました。

どういった場所があったら人が移動するかといったことを念頭に置く必要があります。当社としては、この三豊市というエリアの中で、移動需要の創出や移動システムの整備等を担い、**移動の需要と供給を結び付ける「交通商社」モデルを確立して、他エリアへと普及していく**、という役回りを目指すべきかなと考えています。1社で交通をやっていくという時代は終わったと思っています。三豊市には「瀬戸内暮らしの大学」の立ち上げから協力し合っている地元企業13社を始めとする仲間がいるため、長期的な視点に立って、まちのあるべき姿を仲間と一緒に考え、みんなで向き合っていきたいですね。

▶ 移住者が溶け込むために



田島さんの実体験として、移住者が地域で起業して成功する要因はなんでしょうか。

カッコつけないで適切に周囲に頼れるか、が結構大事だと思っています。

僕がまさにそうだったんですが、東京に住んでいる時って、武装しなきゃ生きていけなかったんですよ。要は学歴とか、こんなキラキラしたことをやっていますといった実績を語る、みたいな。でも、三豊に移住してきたら、まず最初に学歴とかこれまで武器だと思っていたものが全く武器にならなくて。武器をなくした真っ裸の状態で、自分は何をやりたいんだろうと向き合って、本音で地元の方と話していくことが大事だなと思います。



移住者を受け入れる地元側が意識することは？

移住者に**「役割」と「居場所」**を作ることです。ここで大切なのが地元の人のふるまいです。

地域に存在する4階層の人

- ・ 観光客
- ・ 関係人口
- ・ 外交的なローカル人
- ・ 内向的なローカル人

三豊市では**“外交的なローカル人”**が多く、内(地元)と外(移住者)をうまく繋いでくれています。

地域の人を高校生に例えると…

- ・ 高校3年生：地元の100年企業。「信頼資産」「人脈」あり
- ・ 高校2年生：起業している移住者。「アイデア」あり
- ・ 高校1年生：移住したての人。「熱量」「柔軟性」あり

1年生が起業するときには3年生が銀行に同行し、支店長クラスと挨拶をするなど、地域内での顔つなぎをサポートしてくれています。

「外交的なローカル人」「高校3年生」が中心となり、移住者(1年生)に役割と居場所を作ってくれていることが、三豊市に移住希望者が増えている大きな要因であると実感しています。



移住した当初から毎晩のように通い、地域の人と繋がった場所。三豊市での生活の原点であり、まさに居場所。僕にとってのANOTHER SKYです。



▶ 取材を終えて…



「移動格差から来る学びの格差の是正」、田島社長が「暮らしの交通(株)」を設立された経緯や目指すまちの姿をお聞きし、子育て世代として、住む場所によって選択できる学びの範囲が決まってしまう現状について、改めて考えさせられました。また、学生や子育て世代の保護者だけではなく、高齢者やまちで生活するすべての人たちの暮らしを支える「交通」について、今後どのように向き合っていけるのか、注目していきたいです。

(理財課 松下)

田島さんの笑顔が印象に残りました。取材の中で、三豊には外向的な性格の人が多いとおっしゃっていましたが、田島さんの素晴らしい人間性があるから、地元みんなが明るく、協力的になるのだと感じました。また、周囲に頼れるかどうかは、自分をどこまでさらけ出せるかということが重要とおっしゃっていたことも印象に残りました。他の組織の方と協力して業務を進めていく機会があれば、とても参考にしたいと感じました。

(管財総括第二課 池田)

